

(2)チェチェメ二号とリエン・ポロワット号

～2隻のカヌーから見えてくるミクロネシアの航海術と船造り～

海工房代表取締役 門田修

(司会)

続きまして、今度は門田修さんのほうからお話と映像を見せていただけるかと思います。門田さんは、この海洋文化館で今皆さんごらんになれる映像が115余りありますが、それを一手に引き受けていただいた、海洋あるいは民族映像の専門家、第一人者でいらっしゃいます。

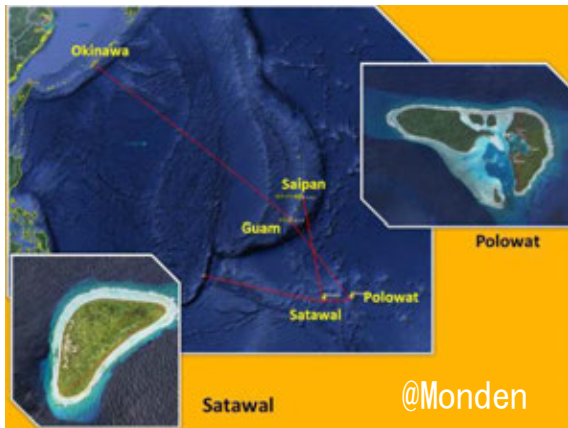
実は、先ほど出ました「チェチェメ二号」の映像をつくられた映像作家の門田龍太郎さんはお兄さんでありまして、そのとき弟の門田さんも一緒に「チェチェメ二号」の伴走船に乗って撮影に協力されました。そのときから、こういう海洋映像に興味を持ち、ステールカメラから始まりまして、今は映像作家として広くご活躍になっています。その作品は、NHKを初め「宇宙船地球号」とか、有名な番組で幾度も放映されております。それでは、門田さん、よろしくお願ひします。

(門田 修)

どうも初めまして。ご紹介いただきました門田です。ここで海洋博がありましてから40年たったということで、そのときから私は関わっているわけですが、この40年間に海洋文化館がミクロネシアと関わってきた2つの大きなイベントがあると思っています。その最初の一つが、このチェチェメ二号です。先ほどから須藤先生、後藤先生からいろいろお話が出ていますが、1975年に3,000キロをカロリン諸島というところから航海してやってきたカヌーです。これは須藤先生が館長をしてらっしゃる国立民族学博物館に展示してあるカヌーです。



これは、それから三十数年たったもう一つのカヌーでして、サタワルの隣のポロワットというところで、海洋文化館が注文をして新しく造ってもらったものです。その建造記録をずっと私が担当することになりまして、約100時間ほどの記録にまとめたものがあります。海洋文化館とミクロネシアとの関係ということで、その2つの大きなイベントが、どういふことであつたのかというお話をしたいと思ひます。もちろんこのときは私も20代で、フィルムで撮つていますが、こつちはもう60代、デジカメで撮つた写真です。



グアムーポロワットーサタワルの距離

最初に、ざっと場所の説明を、距離感といえますか、どれくらいのところにあるのかという説明をしたいと思います。Google Earth の写真ですけれども、沖縄からグアムまでが大体 2,200 キロぐらいです。この線をぐるっと回すと、ちょうど札幌あたりに当たります。ですから、大体それぐらいの距離と思って想像してみてください。

このグアムと、先ほどから話に出ています「チェチェメニ」のふるさとであるサタワル、これが 800 キロちょっとです。それと、グアムからポロワット

も同じような距離です。サタワルとポロワットの距離は約 200 キロ。ここの間はカヌーで彼らは行き来をしています。兄弟のような島でして、ライバル関係であるか、あるいは兄弟であるか、仲よしであるかというのはちょっと複雑なところですが、ただ、姻戚関係といえますか、みんな結婚したり、あるいは葬式などで行き来はしていますし、親戚同士でしょっちゅう行ったり来たりしている関係です。ここは名前を書いていたのですが、ヤップ島です。

左下はサタワル島、須藤先生が 2 年間ぐらい調査されていた島ですね。ここにちょっと赤い線を引いてあるのですが、これで距離がちょうど 2 キロです。Google Earth は便利なもので、こうやって調べれば、すぐに距離も出てきます。それで、右上のほうはポロワット、島の右側だけは人が住んでいる島でして、集落がこの湾沿いに幾つかあります。左側は全くの無人島。無人島ですけれども、戦争中は日本の兵隊が多いときで 2,000 人とか 3,000 人とかいました。それで、ここら辺に灯台があるのですが、それも日本軍が造ったものです。本当は飛行場があるのですが、もうすっかり密林に覆われて、今は影も形もありません。



Satawal in 1975

チェチェメニ号の沖縄への出発

この写真が 1975 年の「チェチェメニ」の出発、沖縄に向けて出航する前の雄姿です。これは実際に日常に使っていたカヌーで、その中でも 3,000 キロの航海に耐えられるだろうということで、丈夫な船ということで「チェチェメニ」が選ばれたわけです。ただ、これは日常で普通に使っていたものですから、大航海するために特に何かをしたということはありません。ただ、ちょっとわかりづらいのですが、全部ヤシのロープで縫い合わせてつくってあります。いわゆる縫合船というやつですが、それを全部外してばらばらにして、もう一度締め直して、

補強といえますか、リニューアルして航海に出ました。ここにちらっと見えるのですが、片仮名で「チェチェメニ」と書いてあります。この後出ます船長のルッパンさんが書いたものです。



この写真は出発当日です。10月28日です。今日は10月29日ですので、何か因縁があるような日にちですけれども。船は個人のものではないですが、「チェチェメニ」の持ち主の一族のトコメイさんという方です。体に黄色いものを塗っていますけれども、ウコン、ターメリックです。これはあらゆるときに体を清めるとか、あるいは悪い何かを防ぐとか、そういったことで安全のためということ塗ります。

先ほど須藤さんからちょっとお話がありましたが、1970年にルッパンがサタワルからサイパンまでの

航海を何十年ぶりに再開したということがありますけれども、サイパンまでは大丈夫だろうということだったのですが、日本までとなると、みんなやはり海岸に出て、女性たちは泣いて別れを惜しみました。これは実際の航海には使わなかったのですが、パンダナスでできたセールです。民博に飾ってあるのも、このときのセールを飾ってあります。



この写真の人がマスターナビゲーターのルッパンさんです。戦争中ミクロネシアは日本の植民地だったわけですし、現地の子どもたちに日本語を教えたりするために公学校というのがあったのですが、たしか彼はそこで勉強したものですから、日本語が非常に巧みで、片仮名も書けました。ですから、少年のときから非常に賢い優秀な子だったのでしょう。正確な年は知らなかったのですが、先ほどの須藤さんのご紹介では、50歳になったかならないかぐらいのときですね。

この下の2枚はさっきから出ているマウ・ピアイルクさんです。ただ、このころはマウ・ピアイルクさんというのは、島の中でも非常に優秀な若手のナビゲーターということで知られていまして、これはちょうどハワイに行く一、二カ月前ですかね。この後ハワイに行って、ホクレア号に乗ることになります。ただ、今のようにマウ・ピアイルクがこんなに世界的に有名になるとは知らなかったものですから、私も写真はほとんど撮っていないで、ピウスと呼ばれたので、ピウス、ピウスと呼んでいました。これは無人島にカメを取りに行き、ウミガメとヤシガニをとって、ヤシガニをその場で焼いて食べているところです。年は幾つぐらいですか、40そこそこになったかならないかぐらいの感じです。マウのほうは英語ができたものですから、ハワイに行く、ホクレアのほうに行く。ルッパンは日本語が巧みですから、我々と沖縄に行く。そのような役割分担をしました。



チェチェメ二号の航海の様子（その1）



チェチェメ二号の航海の様子（その2）



海洋博覧会に到着したチェチェメ二号

この写真は航海中ですが、今も昔も、これは40年前ですが、もっとずっと前、100年前、200年前と全く変わらない姿の航海風景だと思います。ただ、帆は布の帆ですから違いますけれども、常にこうやって片足を入れて、舵をとりつつ、ここに1人隠れていますが、これは水をくみ出している人です。ルッパン、トコメイ、イキチェップ、ヤレマイ、ナモリック、テッパン、いまだに40年たっても名前を忘れないぐらいに覚えていますけれども、ただ、今生きているのは、彼が僕とほとんど同じぐらいの年だったのですが、たしか彼だけしか生きていないという話です。

この写真も全部航海中ですが、本当に食料としてはヤシの実。水は持っていきません。ヤシの実が要するに飲料水です。手に持っているのは、パンノキの実をついたパンモチという保存食です。かなり保存できるものです。これはグンカンドリですね。割と島に近いところで撮っているのかもしれませんが。

これは先ほどの須藤さんの発表でもありましたけれども、沖縄近くになったところですが、彼らは何かくれとか、要求は一切何もしなかったのですけれども、ただ初めての寒いところに行くというので、カッパと何かちょっと暖かい服をくれということで、こういったものを渡しました。

1975年12月13日に、沖縄の海洋博（沖縄国際海洋博覧会会場）に到着しました。

リエン・ポロワット号 建造・航海の映像記録
Lien Polowat : Document construction and voyage



これで 40 年前の話は終わりです。次は 4 年前の 2012 年に、今度はサタワルでなくてポロワットという島でカヌー造りを始めました。カヌーを造りたいというか、チェチェメニ号が結局民博（国立民族学博物館）のほうに行ってしまったので、ここにはなかったのですが、ここでも何かそういったミクロネシアの大きな、航海したやつが欲しいなということで、では造ってもらおうという話になりまして、どこで造るかというのは、グアムだ、サイパンだ、ヤップだとか、交通の便のいいところで造ったほうが、建

造記録を全部撮るといことも一つの条件だったものですから、そっちのほうがよかったですけれども、ただ、なかなかどこでもいいというわけにはいかなくて、これはパンノキですけれども、大きなパンノキが手に入るところ、あるいはこういった男たちがすぐについて手伝ってくれるようなところということで、ポロワットで造ってもらうことにしました。

2人の“ボ”(伝統航海師)のもと 沖縄への航海を夢に
Led by two Pwo ordained master navigators, wishing to sail to Okinawa



それで、ポロワットで造るのもう一つの大きな決め手となったのは、この写真の 2 人の人物がいたおかげなのです。このプロジェクトが始まる以前から私はこの 2 人のことをよく知っていました。2 人とも「ボ」という称号を持つ航海師なのですが、特にマニーさんはグアムに滞在して、グアムに生活の場を移してしまっていて、連絡が非常にとりやすいということと、ポロワット島のいわば外交官のような形で外部と接していました。航海師ということですが、みんな航海術というのは秘密にして、なかなか外には

は出さないものですが、マニーさんは積極的に教えてくれるといいですか、聞けば教えてくれる。ここでも一度やったことがあると思うのですが、ミクロネシアの航海術とはどういうものかということ、パワーポイントを使って話をしてくれたりしました。

マニーさんが全部マネジメントしてくれるということと、もう一人の重要人物、テオ・オノペイさんです。これは村のチーフです。村の酋長ですね。村では非常に絶大な力というか、信頼を持たれている人で、相撲取りのようで、非常に貫禄もあります。この 2 人が、テオさんも、じゃあ島を挙げて協力しようではないかということになりまして、チーフの許可がなければ島では何もできないわけですから、2 人のおかげでポロワットで建造を始めることができました。

とにかく島でカヌーを造るといことは一大イベントなんです。カヌーを造ること自体

は、常に1隻あるいは2隻ぐらいのカヌーは造り続けているので、特別なことではないのです。ですから、それは1年かけたり2年かけたり、いろいろですけれども、造りかけでやめてしまったのもあるということなのですが、今回は我々が依頼をして、ちゃんといつ頃までに、もちろん何月とか何日とか、そんなことは言いませんけれども、いつ頃までに造ってくれればということをお願いをしました。

それで、当然お願いするわけですから、賃金とか日当を払うわけです。島の男たちにとって島で現金収入があるということは非常に希有なことでありまして、みんな喜んでくれていました。特にアメリカとか、遠いところではアラスカの方まで、缶詰工場だとか漁船とかに乗ったりして出稼ぎに行っているのですけれども、そういう男たちも2人ほど、わざわざこの船を造るというので帰ってきて、みんなで協力してやってくれました。



男だけではなくて、こちらの女性たちも、これはパンダナスの葉っぱを乾燥して、編んでこれから帆をつくろうというところです。子どもたちもそうです。とにかく島中を挙げてこのカヌーを造るというプロジェクトに参加してくれました。

ただ、私たちが出した条件というのは、期限もいつ頃までに造ってくれればという緩やかなものでしたし、もう一つは、やっぱり島にある材料で、なるべく伝統的な技法でやってもらいたい。それは映像で記録に残すためにお願いしました。電動工具

は一切使わないというようなことですが、それはほとんど我々の杞憂であるというか、お願いするまでもなく、島には電動工具は一つもなく、これは全部ココナツのヤシのロープですけれども、あるいはこれは、木の種類は何種類か使っているのですけれども、流木であるとか、とにかく島で手に入るものだけで造りました。



これは、細いのも太いのも全部同じヤシのロープですね。これをだんだん撚（よ）って行って、こういうふうに太くしていく。ただ、ロープだけは、彼らは今は化学繊維であるとか綿のロープであるとか、そういったものを使っていますけれども、全てをヤシのロープでやるというのは彼らにとってもちょっと珍しいというか久しぶりのことだったようです。

それで、割と短時間に、実際半年で毎日30人近くの男が来て、朝の9時ごろから、終わりは2時ご

ろで早いんですけれども、みんなどんどんやってくれたものですから、実働では半年かからずにカヌーができ上がってきました。一つよかったなと思うことは、やっぱり島にお金を落とせたということと、こういった若い人たちが仕事に参加して、カヌー造りの一から

十までを全部見る事ができたというのが大変よかったと思います。

こういった手斧（ちょうな）は、なかなか扱いが難しいものなんです。手斧のうまい、下手というのはありますが、若い人でもみんなできるんです。それはちょっと驚きというか、すごいなという感じでしたけれども、もちろんカヌーを造るための船頭というか船大工の棟梁のような立場の人がいまして、その人の指導のもとでやります。ただ、総合的にはテオさんという村のチーフの掛け声で一斉に仕事は始まりました。



リエン・ポロワット号の建造の様子（その1）

この写真はコンコン、コンコン、底ですけれども、ひっくり返して、ひっくり返して、何度も何度もひっくり返して、それで手でさわったり、いろいろ長さを手ではかったり。いわゆるメジャーといひますか物差し、目盛りというのは一切使っていないですね。全て手の長さ、指の長さ、あるいはさっきアルソンさんの話にもありましたヤシの葉っぱだとか、そういったもので計測していています。ただ、線を引くのに鉛筆を使っていました。鉛筆だけはちょっと現代的ですけれど。



リエン・ポロワット号の建造の様子（その2）

この写真はさっき言ったロープづくりですね。これは板と板を縛っているところです。

それで、カヌーを造るときから、「できれば沖縄に走っていこうよ」というのがみんなの合い言葉だったんです。そのためには、立派なというか、頑丈で、非常に性能のいいものを造らなきゃだめだぞということでみんな力が入ってまして、事実でき上がったものが試走したときはテオさんも満足するぐらい非常にすばらしい、いいものができたと、これだったら絶対行けるぞということで張り切ったんです。

もう一つは、40年前にチェチェメニ号が沖縄に行ったというのは、そこら辺の島ではレジェンドとして残ってまして、それに対抗するといひますか、今度沖縄に行くのはポロワットの番だぞという意識もありましたけれども、残念ながら、国のほうで、せつかく造ったものをそんな危険にさらすわけにはいかないということで、沖縄への航海はなりませんでした。

進水！ しかし 沖縄への航海かなわず・・・
Launched,
but plan to sail to Okinawa was not allowed・・・



出航前の儀礼
Traditional rituals before departure



沖縄までは無理ですけれども、とにかく走りたいということで、グアムまでは800キロあるんですけども、グアムまでは行こうと。それで、グアムで解体して、コンテナに詰めて沖縄まで運んで、またここで組み立て直そうということに決まりました。これは出航の日ですね。いろいろと儀式がありまして、こういった儀礼も記録できてよかったなと思っております。

無人島で偶然サタワルのカヌーと会うリエン・ポロワット
Lien Polowat happened to meet canoes from Satawal on the uninhabited island

サタワルのカヌーの到着を手伝う
ポロワットの男たち
Polowat men helped
the arrival of Satawal's canoe



リエン・ポロワット号の出航を手伝う
サタワルの男たち
Satawal men helped
Lien Polowat's departure



ですから、この写真はカヌーができてから、ポロワットから無人島に寄って、ウミガメをとって食べて、肉を持って、それからグアムに運ぶと。アウトリガーは外さないと運べませんので、グアムで一部解体してコンテナ船で沖縄に運ぶ。沖縄に着いたところにポロワットの男たちがまたここに来て、再組み立てをする。それでポロワットへ帰っていくということです。

海洋文化館へリエン・ポロワット号を届ける航海
航海: ポロワット→無人島→グアム
グアムで一部解体してコンテナ船輸送: グアム→沖縄
館内再組立: 海洋文化館 → ポロワットへ帰島

Voyage to deliver Lien Polowat to Oceanic Culture Museum
Sailed from Polowat to Guam (stopped 1 day at an inhabited island)
Disassembled outrigger parts on Guam to send in container ship
Reassembled and set in the museum



ちょっと多かったですけれども、これが乗組員です。グアムまで行った乗組員8人。それから、ここにいますが、そこに座っている宮澤京子でして、彼女もずっとこのカヌーに乗って航海しまして、船の上で撮影をしました。

無人島に寄ったとき、本当は偶然ではないのですが、この黄色いのはサタワルの船です。サタワルからここにウミガメをとりに来ていまして、これが我々のポロワットの船ですね。それで、たまたま会いまして、お互いに助けたり情報交換をして、それでサタワルの船には亀を積んで、また帰っていききました。

グアムへ 2013年6月13～18日 (途中無人島一泊)
To Guam from June 13 to 18, 2013 (stopped one day at an inhabited island)



@Monden



リエン・ポロワット号のグアムまでの航海

この写真は航海中ですね。こういう姿は 40 年前も今も全く変わらないわけです。この水くみはとにかく四六時中やってなければいけない。舵もずっと持っていなければいけない。帆綱も持っていなければいけないということで、最低これだけの人は必ず働いてはいるわけです。

我々は途中までといたしますか、グアムまでは行けなかったのです。グアムの国境線のあたりまで漁船で伴走しましたけれども、さっきのチェチェメニ号も、我々の伴走船はふじやま丸という、亡くなった森繁久弥さんのヨットを借りて行ったんですけれども、そのふじやま丸というヨットよりはるかに速くて、風さえよければビュンビュン走っていく。



リエン・ポロワット号のグアムまでの航海



これでグアムに着いて解体して、せっかく造ったのに、またカッターナイフで全部切って外すという作業ですね。



この写真が、コンテナ船でここに着いたときの状態です。ここでみんな再組み立てといたしますか、組み立てをしました。



海洋文化館の中での組立作業（その1）



海洋文化館の中での組立作業（その2）



リエン・ポロワット号の建造で唯一電動工具を使ったのはこれだけです。これは熱風。これはパンノキの樹液なんですけど、接着剤ですね。これは島から持ってきたものです。ここで本当は火をたいてヤシの葉っぱを燃してやわらかくして着けていきますが、館内で火をたくわけにはいかないので、熱風だけでドライヤーでやりました。

一つ、これはどこの島と限らない話ですが、2012年、これがマニーさんですね。さっき出ました航海術を教えるためのマットの上に石を置いて、まず子どもに一番最初に星を教えます。とにかく星の名前を覚えさせることですね。星の位置、名前を覚えさせること。そういったことをカヌー小屋でやっていました。

これが3年後、2015年です。この子はもうこんなに大きくなって、船に乗ってグアムに出ていくところです。中学生、高校生になったら街へ出ていくということで、一番いろいろな伝統的技術を習得し

たい期間、15～16から、わかりませんが、20代、30代で島に帰ってくるまではずぼんと抜けちゃうわけですね。

建造・航海に関する儀礼の記録
Document traditional rituals for voyage



木の伐採: Cutting breadfruit tree for hull



進水式: Launching ceremony



航海安全祈願: For safety voyage



航海後 精霊を海へ帰す: After the voyage, return of sea spirit to sea @Monden

それと一つ、これは木を切る前の儀式です。これは進水式のときの儀式、これは航海に出るときの儀式。これはアタリと言って、航海が終わった後です。航海が終わってもすぐに普通の生活をするわけにいかないの、航海が終わって4~5日たってから、この儀式が終わって初めて普通の生活ができるわけです。なぜこれをしたかという、こういった儀式というのはなかなか撮影させてもらえないという、そんなに公開するものでもないの、なかなか難しいのですが、ただ、この2人、マニーさんとテオさんのおかげで我々は全て記録することができました。

建造・航海に関する儀礼の記録
Document traditional rituals for voyage



@Monden

それで、マニーさんは実はカヌーができてから数カ月後、突然脳溢血で亡くなりました。そして、テオさんはここ沖縄に来て、カヌーを組み立てて、島に帰ってから、やっぱり突然亡くなりました。だからこれは非常に貴重なものだと思います。

長い長い呪文があるんですが、呪文も全部こうやって記録させてもらっていますので、そのうち翻訳なり何なりできればなと思っています。

もう一つは、今年の5月、さっきも話がありましたけれども、太平洋芸術祭ですね。そのとき、ポロ

ワットの近くのホークという島から1隻、そしてポロワットから2隻、その後、サタワルとかラモトレックとか、いろんなところからカヌーが、グアムまで800キロ、1,000キロの道のりをものともせず、やって来て集まってきました。ですから、今も彼らにとってカ

ヌーがいかに大事で、いかに誇るべきものかということをうまく示していると思います。



グアムで新造されたカヌー（右）

このカヌー（写真の右）は、チャモロ型といいますが、グアムで新しく造られているカヌーです。

何を言いたいのか、まとまりがなくなりましたけれども、2つの大きなイベントがあったということで、それについてざっとご紹介をしました。

どうもありがとうございました。以上です。